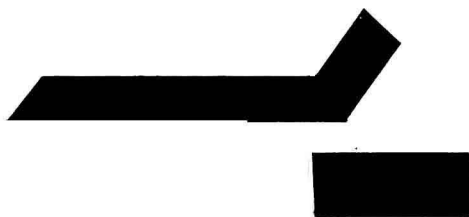


シナリオ構造論

野田高梧

野田高梧



宝文館叢書

シナリオ構造論 ©

昭和五十一年十一月二十日第一刷発行

著者 野田 高梧

発行者 羽生 和男

印刷者 川瀬 昇吾

発行所 宝文館出版 株式会社

101 東京都千代田区神田神保町三十一七

振替口座番号 東京五一二八〇

電話東京(二六一)四四〇九

印刷 鎌倉印刷

序

說

映画の発生……二映画の文法・・・・・・・・一二

獨創性の基礎……………二六

概

[illegible]映画とは。。。。。。。。。三二

映画美に就いて ○○○○○○○○○○○○ 三四

文学性に就いて……………三七

大衆性に就いて。四二

倫理性に就いて ○○○○○○四六

長さの問題・・・・・・・・九九

構成・・・・・・・・一〇三

題材・・・・・・・・一〇四

テーマ（主題）・・・・・・・・一一二

ストーリー（筋）・・・・・・・・一一七

プロット（はこび）・・・・・・・・一二四

コンストラクション（構成）・・・・・・・・一三二

局面・・・・・・・・一四一

劇的局面の発生・・・・・・・・一四二

劇的構成の原則・・・・・・・・一四七

性 格 二二七

性 格 の 問 題 二二八

性 格 の 描 写 二三四

性 格 の 発 展 と 変 化 二四七

人 物 の 数 二五一

心 理 の 具 象 化 二五七

結 語 二六九

あ と が き 二七一

シナリオ用語 卷 末

序

說

映画の発生

絵といい、彫刻といい、音楽といい、或はまた、文学といい、演劇といい、いずれも三千年、四千年の歴史をもつてゐるのに、映画は誕生後まだ六十年にもならない。

殊にそれが「声」をもつに至つてからの歴史は、やつと二十年に手がとどいたばかりである。問題はそれが若いという点にある。

エディソンとリュミエール兄弟とどつちが先きであつたか、それはこの場合たいして問題にならないが、とも角も十九世紀の末に、それまではスクリーンの上に静止していた幻燈の映像が、突如として実物さながらに動きはじめたということは、おそらく彼等発明者たち自身でさえ予期しなかつたであろうほどの、素晴らしい、大きな出来事であつた。

その発明が人類にもたらした功績のうち、わけでも大きな二つの功績は、その「動く写真」としての独特の記録性が、近代の科学、わけでも医学や理学や工学などの、進歩の上に貢献しつつあるその大きな利用価値と、もう一つは、それ以上に、直接民衆を対象とする文化材として、云いかえれば「動く写真」というような形而下的な存在としてではなく、「纏まつた観念」を内包する形而上的な存在として、民衆のこころの奥に確乎たる地盤を占めるに至つたそのことである。

映画史のつたえるところによると、ルイとオーギュストのリュミエール兄弟は、彼等の発明後ほんの七八年しかたたない時期において、すでに次のような嘆声を發したといわれている。

——一九〇〇年以後シネマトグラフの応用は演劇をめざして進み、舞台演出の真似をはじめたので、その用意をして

いなかつた自分たちは、ついに製作を中止するよりはか仕方がなかつた——。

この言葉は、つまり、ジョルジュ・メリエスやレオン・ゴーマンやシャルル・パテなどという当時の新人たちが、シネマトグラフの性能をその原始的な状態から解放して、将来のそのの在り方に向つて進めはじめたことに対するリュミエール兄弟の驚嘆の表明であつたともみられよう。

発明の当初、試作品として公開されたフィルムは、エディソンのヴァイタスコープの場合では、渾に碎ける波だとか、そのころ評判だつたドロリタという女のダンスだとか、大男と小男の拳闘だとか、或はまたクシャミで紙きれを吹き飛ばすフレッド・オットーという男の顔、これは偶然にも世界最初のクローズアップになつたといわれているが、等々、せいぜい、三十五フィートから五十フィートぐらゐまでのものだつたと伝えられているし、リュミエール兄弟のシネマトグラフの場合にしたところで、彼等の写真工場の女工たちが羽飾りのついたボンネットをかぶつて「まるでゾラの小説のなかにでも出てきそうな恰好で」その工場から出てくるところだとか、駅に到着する列車の動きだとか、海水浴の風景だとか、これとてもまた十七メートル前後の簡単な実写にすぎなかつたといわれている。

当時、リュミエール兄弟のその新しい発明品に心をひかれたジョルジュ・メリエスが、それを種に一儲けしようと考えて、その権利の譲り受けを申込んだのに對して、オーギュスト・リュミエールは、却つてメリエスの投機心を懸念して、この発明品は今のうちこそ科学的な珍らしさもあつて、多少は金儲けの材料にもなるうが、おそらくそれ以上の商業性があるとも考えられないから、うつかりするとあなたは破産するかも知れないと、まじめな顔で忠告したという話がある。がのこつている。

このオーギュストの忠告は、彼がその発明品の持つ形而下的な価値のみを重くみて、その形而上的な面における将来性を見通し得なかつた過誤から出ているものだというべきであろう。とすれば、彼等が発明した「動く写真」は、そ

れが発明されたというその事よりも、むしろ、その持つ特性を駆使することによつて、「纏まつた観念」を伝達させるということを発見したその発見の方に、より多くの文化的な意義があるといつても決して過言にはなるまい。

とは云え、しかし、リュミエール兄弟にしてからが、公然そういう事に無関心だつたわけではない。私の聞いている範囲では、「作為」のある所謂ストーリー・フィルムなるものを世界で最初に作りはじめたのも彼等であり、たとえばそれは次のような類のものであつたといわれている。

——撒水夫がホースで水を撒いているところへ、子供が来て、そのホースの一端をふむ。水が出なくなる。撒水夫がホースの筒口を覗く。と、子供が足をはなすので、撒水夫が濡れ鼠になる——。

これは一八九五年の十一月十六日、ソルボンヌで映写された世界最初の公開作品のなかの一つだが、さらに一八九七年（明治三十年）三月、東京神田三崎町の川上座で、「自動幻画」という名称で公開されたリュミエール作品のなかにも『悪の報ひ』という大げさな題の、次のような一巻があつた。一巻とはいつても、勿論これも十七メートル前後のものである。

——一人の男がベンチに腰をかけて新聞に読み耽つている。と、もう一人の男が来てその男のポケットからはみ出しているハンケチに何かいたずらし、知らん顔でそのベンチの一方に腰をおろす。新聞の男はやがて汗を拭こうとしてハンケチをとりだし、いたずらがしてあるのに驚いてハツと立ちあがる。その途端にベンチが跳ねあがつて、相手の男がモンドリ打つてころばおちる——。

今から見れば一顧にさえ値しないようなこんな簡単な作品も、しかし見方によつては、リュミエール自身無意識のうちに、早くもシネマトグラフの性能をその写真的範疇から解き放じて、今日の映画の在り方に向つて一步をふみださしめた試みの一つであつたとも考えられよう。

つづいて、一九〇〇年の秋、ジョルジュ・メリエスが二十の「動く画面」をつなぎあわせて『シンデレラ物語』“Cinderella”を作りあげた時には、たといそれが、その有名な物語の「動く挿面」のようなものにすぎなかつたにしても、最早それは単なる「動く写真」ではなくて、メリエス自身「人為的に配列された場面群」と呼んでいるように、それら二十のショットから成る「動く画面」によつて構成された一つの「纏まつた観念」の表出であつたと考えるべきであらう。その『シンデレラ物語』は次のような構成を持つてゐるものであつた。

- 1 台所で働くシンデレラ
- 2 仙女（フェアリー）
- 3 鼠が馬に変わる
- 4 南瓜が馬車になる
- 5 宮殿の舞踏会
- 6 眞夜中を告げる時計
- 7 シンデレラの寝室
- 8 時計の踊り
- 9 王子と銀の靴
- 10 シンデレラの代母
- 11 王子とシンデレラ

- 12 教会への到着
- 13 結婚式
- 14 シンデレラの姉達
- 15 王様
- 16 結婚式の行列
- 17 結婚式の舞踏会
- 18 天球
- 19 変身 (トランスフォーメーション)
- 20 シンデレラの勝利

なお、これにつづいて彼が製作した『ジャンヌ・ダルク』『Jeanne d'Arc』は十二の画面、『クリスマスの夢』『Le Songe de Noël』は二十の画面、そして更に一九〇二年の『月世界旅行』『Voyage dans la Lune』は『シンデレラ物語』の約二倍の長さで八二五フィートもあり、三十の画面から成つていて、そこまで進むとはやそれは単なる挿画的な画面の配列以上に、立派に一つの物語を構成しているものであつた。

- 1 天文学倶楽部に於ける会議
- 2 月世界調査旅行の計画
- 3 工場。ロケットの建造
- 4 煙突の林立する鑄造所、巨砲の鑄造
- 5 ロケットに乗り込む天文学者たち
- 6 巨砲に装填されるロケット

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|----|----|-------|----|----------|----|----|-----------|-----------|--------|---------|--------|-----|---------------|------------|-------|--------|------------|----------|
| 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 |
| 歓迎と賞讃 | 祝賀の行列 | 救助 | 海底 | 大洋へ墜落 | 落下 | 月世界からの脱出 | 追跡 | 脱走 | 月世界の王国、軍隊 | 捕虜になる学者たち | 月世界の人々 | 大きな茸の岩窟 | 火口を降りる | 大吹雪 | 北斗七星、雙子座、土星など | 火口原。爆発する火山 | 月世界到着 | 月の「眼」へ | 月へ向つての空中飛行 | 発射。見送る人々 |

28 海兵隊と砲車隊の行進

29 記念碑除幕式

30 歎呼する群衆

エディソンの場合にしても、一九〇二年には、彼の協力者の一人であつたカメラマンの、エドウィン・ポーターが九つの画面から成る全長五〇〇フィートの『アメリカの消防夫の生活』“The Life of an American Fireman”を作つている。

1 消防署の署長室

夕刊をよみ終つた署長が事務机の前でうとうととしている。その画面の壁の部分に別の画面が円形の枠のなかに現われる。そこでは母親が赤ん坊を寝かしつけている。その傍のガスの火がカーテンに燃え移る。——この二重露出の方法は特に「夢の風船」“dream-balloon”と呼ばれ、一般に、人物の心理とか夢とかを表現する技法の一つとして、その後も暫く用いられたものであつた。——やがて署長は目をさますと不安そうに室内を歩き廻る。

2 街路の火災報知器の接写

そこへ男の手が現われて、その蓋をあけ、鉤をひいて電流を通じる。

3 消防署の寢室

一列にならんだベッドで眠っている消防夫たちが警報を聞いて飛び起き、忽ち身仕度を整えて、中央の穴の眞鍮の柱を傳つて階下へすべり降りてゆく。

4 ポンプ置場

5 その外景
消防夫たちはその六つのドアを開いて、急遽、厩から馬を引きだし、ポンプにつないで、出動準備をいそぐ。

6 現場への道
ドアが真一文字に開かれて、勢い立つたポンプが走り出てくる。

7 火災現場
次から次と先きを競って現場へ急行する消防馬車。

8 室内（寝室）
消防隊がいずれも全速力で続々到着する。ホースからは水が矢のようにほとばしり、梯子が二階の窓にかけられる。

9 再び7の場面
焔と煙に包まれて右往左往している母親と子供、母親は必死に救いを求めるが遂に煙に巻かれて昏倒する。瞬間一人の消防夫がドアを破って現われ、母親を抱いて窓から梯子づたいに救い出す。

救い出された母親は、子供を助けてくれと必死に頼む。消防夫は再び梯子をかけのぼり、やがて無事に子供を救い出して、母親に渡す。母親は両腕にしつかりとその子供を抱きしめる。

これはポーターが、メリエスの作品によつて、幾つかの画面の適宜な配列が一つの物語を構成し得るということを暗示され、その暗示に基づいて製作したものだと言われているが、云わばその一つ一つの画面は1と8と9を除いては、単なる実写の断片にすぎないものでありながら、それらを適宜に一定の方向に配列することによつて、そこに一つの「筋」（プロット）を纏めあげている点では、『月世界旅行』よりも更に幾歩か前進しているのだと云えよう。こうなつてくると、「動く写真」はいよいよもつて単なる「動く写真」とのみは考えられなくなつてくるわけである。